



——会津放射能情報センター発足の経緯、これまでの活動状況は？

片岡 センターの名称からお分かりだと思いますが、私たちの活動は2011年の東京電力福島第一原発事故後になりました。その年の5月に「放射能から子どものいのちを守る会」を立ち上げ、7月に「会津放射能情報センター」を発足させました。

その前は2005年2月から活動している「九条の会・西栄町学習会」です。私がPTAで知り合ったお友達とか、以前からの知り合いの方たちとか10人ほどが集まって、憲法学習会や講演会、憲法を守るヒース、ウォークなどを行ってきた組織です。

退職された高校の先生にお願いし、毎月学習会を開いていろいろなことを教えていただきました。そういう活動を続けてきた中で、あの原発事故が起きました。事故直後、会津若松市から避難した人もしなかった人もいまでも4月には仲間がみんな戻って来て、「私たちにできることをしよう」と放射能から子どものいのちを守る会を立ち上げました。

鎌仲ひとみさんという映画監督がいらつしやるのですが、今後必要かどうかという話で、放射能の危険について考える「ツバチの羽音と地球の回転」という彼女の映画の上映会を、2011年の5月3日に開きました。若松栄町教会を会場に2回上映し、監督のトークを挿みながらのイベントだったので、それぞれ150人くらい、計300人も人が集まりました。

私たちが以外にもいろんな団体が集会を開き、原発事故の後に必要だと思われる活動を始めたのを見ていて、「それぞれに不安を抱えていらつしやるんだな」と思ったので、みなさんに声をかけて「守る会」を立ち上げたわけです。

を検討しましたが、とても高価なんです。どうするかを話し合うために会合を開こうというその前日、ドイツの人権団体からカンパが送られてきました。金額を見ると、ちょうど1台の食品測定器が買える額。びっくりしました。

やっぱり私たちは、誰かに支えられながら生きていたんだなと思いました。その上、私たちの活動は決して独り切りのものでなく、外から見ても必要とされているものなんだな、と改めて思ったわけです。

その時から食品測定器を始めました。例えばお米、水、牛乳、野菜、肉、それに魚だったら身の部分と内臓とを別々に測ったりしました。それ以降、いろいろな食品を2500回近く測っています。今は2台目の食品測定器が入り、2台で稼働しています。

空間線量の数値は、この会津若松でも2011年3月15日、11時過ぎ高くなりました。それでも福島市や郡山市に比べるとそれほど高い数値ではないと言われたりしますが、私たちは「3.11」より前か後かを基準にしていますので、「3.11」以前よりも空間線量が高くなったことは間違いありません。この空間線量はある程度横ばい状態ですけど、土はいつたん汚染されたらなかなか元には戻りません。ですから土壌も測り始めました。

教会のこの建物にはもともとベビーホームという託児所がありました。43年くらい教会が運営してきたのですが、2011年3月末というのは、子どもの人数が少なくなっていましたのでちょうど閉園す



センターで稼働する食品測定器

戦後最大の災害とも言われる東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から、この3月で丸5年の節目を迎えました。今なお10万人近い方がたが避難生活を強いられ、風評被害も払拭されたとはいえない状況にあります。そこで原発事故直後に発足し、会津の子どもたちを放射能から守る活動、安心して暮らせる地域づくりへの啓蒙などに取り組んでいる会津放射能情報センター代表の片岡輝美さんに現状と今後の展望などについてお話をうかがいました。

会津放射能情報センター

代表

片岡輝美さん

①



——具体的な活動は？

片岡 まず大切にしなければならぬと思ったのは、「安全かどうかは自分が決める」という点です。私は以前から個人的に「原発は怖い」と思っていましたし、安全だと言われ続けてきた原発が現実にはあのような事故を引き起こしたわけですから、誰かが言った安全だということそのまますま信じるのではなく、「自分の命に関わる」となれば、安全かどうかは自分で決めるべきだ」というふうに思いました。

そだった中、放射線の空間線量を測るガイガーカウンターで、私たちの周りを測り始めました。さらに食べ物の確認が必要だということ、食品測定器の購入

それでも福島市や郡山市に比べるとそれほど高い数値ではないと言われたりしますが、私たちは「3.11」より前か後かを基準にしていますので、「3.11」以前よりも空間線量が高くなったことは間違いありません。この空間線量はある程度横ばい状態ですけど、土はいつたん汚染されたらなかなか元には戻りません。ですから土壌も測り始めました。

教会のこの建物にはもともとベビーホームという託児所がありました。43年くらい教会が運営してきたのですが、2011年3月末というのは、子どもの人数が少なくなっていましたのでちょうど閉園す

る時だったんです。震災があつて2週間後、閉園になりました。区切りが良かったというもおかしいですけど、原発事故後、子どもたちが少しでもここに残っていたら、いろいろな責任が生じていたろうとは思っています。

それでベビーホームがなくなつたこの場所で、放射能情報センターを始めたわけです。この敷地には、ベビーホームの当時から滑り台があつたんですけど、2012年に、子どもが足を付く場所の土壌を測つたところ、1キ口当たり4500ベクレルという数値が出たんです。それで汚染されていないと思われる新潟県のと、または震災前の土を調べてみると20〜30ベクレル程度。ということは、会津若松もそれだけ汚染があるということです。局所的にそういう所があることは間違いありません。

私には4人の息子がいて、その子たちもベビーホームで育ちましたし、お友達と滑り台で遊んだりもしたので、その滑り台は子どもたちが成長した象徴だと思っていました。だから何とか残しておきたかった。でも、いくら土を取つたところで、線量は減らなかつたんです。滑り台があるから子どもたちが遊んでしまう。そのたびにハラハラする。「遊んじゃだめ」と言わなければならぬ……。ですから2014年の7月に滑り台を撤去しました。

やっぱり悲しかったし、悔しかったし、息子たちに知らせたらずごくがっかりしていました。「僕たちの思い出も原発事故がなくなってしまうんだね」と。

(つづく)